

# 学ばせたい・学びたい・学ぶべき

## —日本史教科書考古学分野の比較研究—

岐阜県立関高等学校 日本史教科書研究会

### 1. 研究の動機

2023年度、文科省新指導要領により、「日本史探究」の授業が始まった。日本史教科書には、文科省や執筆者が我々に学ばせたいものがちりばめられている。しかし、それは必ずしも我々が学びたいものではないかもしれない。教科書にいくらでも「高校生目線」を盛り込むことで、我々が本当に学ぶべきものが見えてくるのではないだろうか。このような考えから、「日本史探究」を履修する「第一期生」である我々は、まずは、冒頭で学習する考古学分野の教科書比較を行い、学ぶべき歴史とは何か、授業のテーマ学習の中で探究することにした。

### 2. 研究概要

まず初めに、考古学分野における文科省の意図を分析した。次に教科書から、執筆者が我々に学ばせたいことを時代ごとのグループに分かれて分析した（右図上、授業内のグループ討議の様子 右図下、クラス内発表の様子）。内容を比較し、それぞれの時代で最も優れていると考えた教科書を選んだ。さらに、我々が学びたい、学ぶべきことについて、グループでの議論を深めた。



### 3. 各時代の教科書内容比較（学ばせたいこと）

文科省が「日本史探究」の指導要領で我々高校生に要求していることは、「それぞれの時代の特色や流れを「多面的・多角的に考察することにより深みを持って理解し、授業での活動を通して良識ある主権者としての態度の育成、平和で民主的な国家及び社会の形成者としての自覚を涵養していく」ことである。一つの事象を様々な角度から捉えてより深く学んだり、日本が歩んできた歴史を主体的に学んだりする姿勢・能力の育成によって、我々が直面している、あるいはこれから直面する諸問題を多面的・多角的に捉えて、「解決の在り方を問う」力の涵養を企図していることが理解できた。

旧石器分野では、山川出版社教科書に注目した。どの出版社も旧石器時代を扱うページ数が少なく、とてつもなく長い時代を生き抜いた人々の暮らしに十分言及していない中で、山川教科書は、移動生活や食生活の話など、比較的具体的な記載が多い。本文中の日本人形成論にも関心が持てた。

縄文分野では、東京書籍教科書に注目した。自然環境の変化に適応した人々が形成した豊かで多様な文化について、シンプルな構成、表現で説明しつつ、我々の興味をひく記述（歯や三内丸山遺跡）が見られたからである。

弥生時代においては、東京書籍教科書に注目した。弥生時代は本格的な食糧生産が始まり、それに伴って政治統合が生まれた時代である。弥生時代の特徴が伝わりやすいよう各社が工夫を凝らす中、金印に関するコラムは、発見時のエピソードも含め、興味深いものであった。

古墳時代においては、各社の教科書記載に類似性が見られると考えた。教科書の構成は異なるものの、各社とも全体的な内容や重点の置き場所が類似していることが分かった（国家形成や対外関係、古墳文化の変容等）。

さらに我々は、飛鳥時代以降登場する木簡についても比較した（右図）。同じ木簡についてであるにも関わらず、扱う内容や視点が異なっていた。各出版社の個性が垣間見える興味深い作業だった。

4社の教科書を比較してみて、大きく2つのグループに分けられると考えた。1つは、山川出版社や実教出版のような個別事象について細かく説明し、生徒たちにより深い学びを提供するグループで、もう1つは多くの写真やイラストを用いて視覚的に時代を捉えさせ、さらにコラムも比較的多く挿入することで日本史に興



味・関心を持たせることに重きを置いたグループである。多様な高校生のニーズに合わせて各社が教科書を構成しているとするれば、いずれの出版社も成功していると言えるのではないかと。

### 4. 「学びたい」から「学ぶべき」への転換

話し合いの結果、我々が教科書や授業で学び、さらに学びたいと考えた内容は、以下の2点に集約された。

- ・イメージしやすく、興味深い事柄
- ・現代とのつながりが想像できて、学ぶ必要性があると考えられた事柄

驚きや感動など、強いインパクトのある文章や写真は記憶に残りやすい。また、遠い過去の事象であっても、現代の暮らしと結び付けて考えられることには興味をひかれるし、歴史を学ぶことの大切さを実感するよい機会にもなる。

先に述べた文科省の意図（学ばせたいこと）には賛同したい。未来を生きる我々には実際、必要な資質であると思う。さらに今回、教科書会社4社の教科書を読み比べる中で、編集・執筆にあたった方々の創意工夫や熱意を感じるものが度々あった。敬意を表したい。

一方、我々高校生の側にも、前掲の通り、学びたいと思う瞬間がたびたび訪れる。では、その思いを、さらに深い学び、すなわち学ぶべきことにつなげていくにはどうしたらよいか。そのためには、生徒自身がみずから学び、考え、表現する姿勢を身につけることであり、そしてそのような授業を展開するための設問を教科書に設けることが必要なのだと考える。

山川出版教科書には、内容についての理解を確認する設問だけでなく、教科書には記載されていないような事象を生徒自身で考えさせる設問がいくつか見られた。実教出版教科書には、「なぜ？」を考えさせ、歴史の舞台裏に迫ろうとする設問もいくつか見られた。清水書院は、生徒自身に調査や議論を促すことで、生徒に対して日本史への興味・関心を持たせ、主体的な学習へとつなげようとする積極的な姿勢が読み取れた。東京書籍教科書には、他社と比べて設問数が少ない印象を受けたが、時代の流れを捉えさせつつ、内容を深めさせるような設問であった。設問においても、各出版社は多様な高校生に合わせて作成していることが分かる。

最後に、我々が考える設問のもう1つの意義・価値について述べたい。我々は、設問は歴史の大局をつかむための羅針盤でもあると考える。

我々は日本史探究の授業において、山川出版社の設問を生徒が主体となって解き進めていく授業形態をとっている。授業でグループになって一人ひとりが自分の考えを述べる際、教科書や資料集のキャプションまでも読み込み、活発な議論を交わすのである。従来の教師による一方的な授業展開では、知識は授業で教わったことのみになってしまい、体系的な学びにならない可能性がある。しかし、我々が実践している授業展開は、生徒が設問解決のため、主体的に様々な知識を吸収し、個々の事象のつながりを考える。すると、時代の大局が自然とつかめて、体系的な学びとなるのだ。設問に取り組むことで、一見断片的に見える細かな知識が結びついて一つの線となり、今まで考えつかなかった新たな歴史像を描くことが出来るのだ。ゆえに我々は、設問は「歴史の大局をつかむための羅針盤」でもあると考える。

### 5. 自作コラムの製作

今回、日本史探究教科書に倣い、「郷土史」に関するコラム・設問を制作した。テーマは古代の集落と官衙である（半布里戸籍と弥勒寺官衙遺跡群）。詳しくは別紙にてご覧いただきたい。

#### 研究参加者（2024年度3年生）

井口明依子 井上璃子 大坪勇翔 岡田蒼来 小川菜南 唐木つぐみ 小池春奈 河村朋亮  
佐伯蓮智 佐藤快 嶋倉りら 田口心優 田中孝誠 水野友斐 武藤結菜 森亮太 森田絵美  
柳川暁音 山口涼太 杉浦ひのか

#### 参考文献

・高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編  
・山川出版社「詳説日本史」/ 実教出版「日本史探究」/ 清水書院「高等学校 日本史探究」  
/ 東京書籍「日本史探究」